

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2014～2017

課題番号：26704012

研究課題名(和文)日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究

研究課題名(英文)Source Community Utilization of Ethnological Collections for Information Sharing in Japanese Museums

研究代表者

伊藤 敦規 (ITO, Atsunori)

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・准教授

研究者番号：50610317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本国内の4機関(国立民族学博物館、天理参考館、リトルワールド、松永はきもの資料館)の米国先住民ホピ製資料を対象として、研究代表者、所蔵機関担当者、ソースコミュニティの人々(SC)の3者で熟覧を行った。それにより二つの異なるコンテキストにおける知(資料情報・伝統的知識)の在り方の差異が明らかとなった。また、熟覧映像は民族学博物館におけるこれまでにない一次資料(映像そのもの)かつ二次資料(モノ資料に関する補足資料)と化した。両者の「再会」は異文化のモノの理解を深めるきっかけになったばかりか、博物館における「メディアとしての人間」の存在意義を気づかせる重要な契機となった。

研究成果の概要(英文)：The project was an academic and practical attempt where researchers, the museum personnel, and people from the source community formed a team within the framework of a joint international research to improve advanced informatization of collected materials (re-collection of material information and disclosure adjustment process). This Project promoted "reconnection" between Hopi (a Native American tribe in the southwestern United States) people as the source community and ethnographic materials that are said to have been created by Hopi and are now stored by cultural institutions, including 4 ethnology museums in Japan. The objective of the "reconnection" efforts was to reanimate the materials. Therefore, museum materials and information were mutually shared; items to be added and corrected were clarified; and additions and corrections were made by reflecting reviewers' interpretations on the basis of a cultural context.

研究分野：文化人類学

キーワード：博物館人類学 協働 ソースコミュニティ ドキュメンテーション 先住民 知識 カルチャル・シティビティ

1. 研究開始当初の背景

各国の民族学博物館は1990年代以降、展示する側・される側・観る側の三者が情報や意見を交換して議論を行う場としての機能を重要視する傾向にある。また文化人類学分野におけるポストコロナル批判や、交通輸送手段と情報通信技術の発達を背景として、研究する側とされる側との間で意見や解釈の双方向性を担保するフォーラム化が推進されている (Peers and Brown 2003; 佐々木 2011)。

民族学博物館が所蔵する資料は多くの場合、文化人類学の研究成果に基づいて収集され、資料情報が付され、展示や図録などを通して情報が再生産されていく。しかしながら資料情報は、記載内容が乏しかったりソースコミュニティ (資料の制作者や使用者やその子孫、以下 SC) の観点からすると齟齬をきたすような記述の混在も指摘されている (齋藤 2010)。これまでの情報適正化は、研究者が資料情報クリーニング作業を実施することで対処してきた。フォーラム化の推進を前提とする場合、それは一方向的な適正化にとどまり、SCの直接的関与が望まれる。例えば、資料もしくはSCの物理的移動を伴う調査の立案である。前者は資料をSCに輸送し (里帰りさせ) SCにて修正点を聞き取る調査となる。これは所蔵機関で展示中の資料が含まれていたり、SCにおける仮置施設の欠如といった状況があるため実現可能性が低い。後者のSCを所蔵機関に招聘し熟覧作業を実施する方法は、機関への経済的負担が大きく、SCにとっても様々なアクセス障害があり実施は難しい。アクセス障害とは、所蔵機関とSCとの間の地理的距離 (物理的アクセス)、渡航費の捻出の困難性 (経済的アクセス)、資料情報の読解や担当者とのコミュニケーションを図るための言語の壁 (情報アクセス) などである。

研究者が助成を獲得してSCを異国の博物館に招聘し、自らが文化的・言語的通訳を務めることで諸種のアクセス障害を乗り越えた事例がある。米国南西部先住民ズニのA:shiwí A:wán Museum and Heritage Center (以下、ズニ博物館) は米国博物館・図書館サービス機構などの研究助成の交付を受け、英国ケンブリッジ大学考古学・人類学博物館や米国スミソニアン協会といった研究・資料所蔵機関と国際共同研究を組織し、世界各地の博物館に散在するズニ資料を熟覧した。さらにUCLA情報学部と連携して各機関のデータベースを統合し、熟覧結果を付記するプロジェクトを進めている。各地の博物館に収蔵された資料を一元管理し、SCでの伝統文化再興に活用する先住民主導のデジタル技術を駆使した現代的な取組は、アメリカ人類学会をはじめ様々な学会で学問的に評価され数々の賞を授与された。米国人文化人類学者のFienup-Riordanは、アラスカ及びロシア先住民ユピックの高齢者複数名

をベルリンの民族学博物館に招聘する研究助成を獲得し、ドイツでユピック関連資料の熟覧を実施した (Fienup-Riordan 2003, 2005)。SCの招聘者は資料との「再会」を果たすことで、現在では制作も使用もされなくなった道具類を身振りとともに解説し、制作や利用時に口ずさんでいた伝統的歌を披露したり、性別や居住村落によって異なる制作法や使用法を明らかにした。単なる資料情報の誤記の修正だけではなく、現在ではフィールドワークを実施しても収集が不可能な消滅した文化的文脈を思いがけず再現させ記録化した点が学問的に高く評価されている。加えて、資料情報が僅少なため展示利用が困難で収蔵庫で死蔵していた「モノ」に、SCの記憶を照射することで文化的生命力を回復 (リアニメイト) させたことは、所蔵機関にとって資料の活用可能性を大幅に増加させた点で意義深い成果である。なお、ズニ博物館と研究代表者の所属機関 (国立民族学博物館、以下民博) とは2009年以来学術交流を促進させていて、2012年には学術協定を締結した。大阪の民博での資料熟覧も実施済みで、本研究はズニ博物館との資料情報共有調査経験から着想を得た。

2. 研究の目的

達成目標は第一に、文化人類学者 (ホピ研究、博物館人類学) である私、各所蔵機関の担当者、SC (ホピの人々) の3者で、資料熟覧を実施することである。第二に、所蔵機関の資料情報や分類ならびにホピの先行研究における見解をSCが文化的文脈に則して提示する知見と照合してデータを整理すると共に、先行するFienup-Riordanの事例では未実施だった熟覧の様子を映像記録化し映像資料解説として編集することである。第三に、整理したデータを所蔵機関および熟覧に携われなかった人たちを含むSCとで共有し、両者におけるさらなる知の継承を展開させ、そのプロセスを追うことである。第四に、上記三点の実施項目を文化人類学的に分析し、博物館資料を用いた知の共有と継承の現代のおよび将来的なあり方に関する新たな調査手法と理論的展望を拓くことである。

なお、これら達成目標は、研究代表者が以下に挙げる申請時 (2013年秋) までに実施した一連の事前調査に基づいていた。本研究で当初対象としていた機関は、民博 (大阪)、野外民族博物館リトルワールド (愛知)、日本郷土玩具博物館 (広島、現在は福山市松永はきもの資料館) の3館であった (その後、天理大学附属天理参考館が加わり4館となった)。対象とした資料は、米国南西部の先住民ホピ族が制作したとされる木彫人形資料で、民博が281点、リトルワールドが83点、松永はきもの資料館が324点、天理参考館が6点収蔵していた。研究代表者は本科研を申請した時にすでに3館での資料調査を済ませていた (資料写真撮影、採寸、資料台帳と底

面記載氏名を手がかりとした制作者遡及調査)。収集に携わった人物へのインタビュー調査も済ませていたので、資料の来歴と収集の目的は明らかにしていた。また、精霊を模した木彫人形のホピでの利用方法(女兒に対する土着宗教教育目的)もすでに明らかにしていた。

3. 研究の方法

本研究の学術的特色の一つは調査手法にあった。従来文化人類学は調査者自身の物理的移動を伴う現地調査を最重要調査手法としてきた。本研究でも現地調査は熟覧結果の共有を図る過程で補足的に用いるが、主たる調査は現地から日本に SC の人々を招聘することであった。収集時には直接的もしくは仲介者を通して間接的に所蔵(収集)機関と SC とが会うが、通常それ以降の両者の再会は想定されない。収集時に付す情報は保存・研究・展示利用を想定したものだが、多くは収集時の情報不足のために収蔵庫で死蔵する。こうした現状に対して資料の文化的再生と将来的な知の継承を図るために、現代の SC の思考を資料に照射する。このプロセスは、認知症患者にライフヒストリーを語ることで、患者の記憶を想起させ脳の活性化を図ったり世代間交流や地域活動に活かす心理療法の「回想法 (remiscence)」に類似する(六車 2012)。それをフォーラム化する民族学博物館と文化人類学の文脈に応用する点で非常に独創的である。そこから期待されるのは、所蔵機関と SC という二つの異なるコンテキストにおける知(資料情報・伝統的知識)の継承実態の検討とともに、民族学博物館資料をめぐる対話と議論の場を活性化させ、その結果今後の知の継承の展開を図り、かつ具体的な事例を通して人類学による新たな理論的展望を拓くことであった。

4. 研究成果

SC として設定した米国先住民ホピを研究期間中に 4 館に延べ 17 人を招聘・派遣した(2014 年 10 月、民博、4 名; 2015 年 4 月、民博、3 名; 2015 年 11 月、リトルワールド、2 名; 2015 年 11 月、天理参考館、2 名; 2015 年 11 月、民博、2 名; 2016 年 4 月、松永はきもの資料館、3 名; 2016 年 10 月、松永はきもの資料館、1 名)。当初対象としていた資料は精霊カチーナなどを象った木彫人形資料に限定していたが、これら 4 館が収蔵する「ホピ製」とされる資料は全て熟覧の対象とすることにした(合計 912 点)。その一点一点に対して、招聘した SC の熟覧者の全員が、自身の記憶や地元コミュニティで語られてきた伝承などを参照しながら丁寧な解説が行われた。

熟覧調査初回では進行方法、時間配分、機材など手探りの状態だったが、招聘した SC の人々も次第に日本の博物館での調査に慣れていった。なお、熟覧の様子は全てデジタ

ルで記録した。ビデオカメラでの撮影に関しては、私が所属する民博での実施の時にはプロのカメラマンを雇用したのだが、天理参考館やリトルワールドといった他館を訪問するときにはカメラマンを雇用すると出張費がかさむため、ボランティアを募集することにした。カメラや照明の設置位置、機材の使用法、データの管理といった内容についても全て研究代表者がゼロから学び、実践に移した。

収録した動画はすぐにパート職員に文字起こしをしてもらい、そのデータを携えて渡米し、先住民保留地などで日本での熟覧者本人達とともに動画を再生させながら誤記が存在しないかどうかを確認する作業を行った(協働編集作業)。資料熟覧を実施した当時、神聖な存在を象った人形などは他の人形と同列視できないため展示や研究活動の対象にしないで欲しい、という要望が寄せられた。そうしたカルチャル・センシティブティへの配慮が必要な資料やついうっかり発言してしまったコメントが存在しないかのチェックも、この協働編集作業の中で行った。一連の資料熟覧調査を通して、それ以前に博物館側が保有していた資料情報とは比べものにならないくらい膨大な伝統知を得ることができた。また、カルチャル・センシティブティへの配慮が必要な資料の存在も明らかになった。

この調査の結果、資料台帳上の単なる誤記探しといった確認作業ではなく、博物館側が収蔵する資料に関するどういった情報を、どういった媒体で、誰のために継承していくのかという、博物館活動の根源の再考にせまる議論を SC の熟覧者や各地の博物館学芸員など行えたのは幸いである。本プロジェクトは申請時や発足当初には想像ができなかったくらい大きな成果を上げることができた。

具体的な研究成果の媒体は主なものを次項に列記するが、口頭発表や文字での発表だけではなく、SC の地元などでの成果共有会や国際研究集会の主催、資料熟覧動画をまとめたコンテンツの展示会での発表など、多様な媒体を介した十分な成果発表を行うことができ、マスメディアにも多数とりあげられた。さらに、本プロジェクト期間に「国際共同研究強化」枠の科研費が採択されたことで、本プロジェクトで培った「再会」の方法論を米国や英国といった日本国外の博物館に拡大することができた。その科研費プロジェクトはまだ継続中であるが、2018 年 3 月末の時点で、3 ヶ国、14 機関、約 2,200 点の資料を、22 名の先住民の熟覧者とともに調査することができた。収録した映像は 640 時間を超える。

<引用文献>

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓(編) 2010 『極北と森林の記憶 イヌイットと北西海岸インディアンの版画』、昭和堂。

佐々木史郎 2011 「フォーラム化する文化人類学 大学共同利用機関としての国立民族学博物館が果たすべき役割を考える」『民博通信』134, pp. 2-7、国立民族学博物館。

六車由実 2012 『驚きの介護民俗学』、医学書院。

Peers, Laura and Alison Brown 2003 “Introduction,” Peers, Laura and Alison Brown (eds.) *Museum and Source Communities: A Routledge Reader*, London and New York, Routledge, pp. 1-16.

Fienup-Riordan, Ann 2003 “Yup'ik Elders in Museums: Fieldwork turned on its head,” Peers, Laura and Alison Brown (eds.) *Museum and Source Communities: A Routledge Reader*, London and New York, Routledge, pp. 28-41.

Fienup-Riordan, Ann 2005 *Yup'ik Elders at the Ethnologisches Museum Berlin: Fieldwork Turned On Its Head*, University of Washington Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

伊藤敦規 2016 「ホストとして関わる人類学 米国南西部先住民ホピと私のこれまでとこれから」(特集 人類学者の存在論) 『社会人類学年報』42: 67-90、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、弘文堂。[査読有り]

伊藤敦規 2015 「再会ツールとしての著作権 国立民族学博物館所蔵カナダ先住民版画資料の著作権処理を事例として」齋藤玲子(編)『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題 国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』(『国立民族学博物館調査報告 SER』131: 211-227、国立民族学博物館。[査読有り])

伊藤敦規 2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義 『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39 巻3号: 397-458。[査読有り]

[学会発表](計 16 件)

Ito Atsunori and Gerald Lomaventema 2017 “Reconnecting Hopi Silversmiths with NMAI Collections,” KAKENHI Project meeting (15KK0069; 26704012), National Museum of the American Indian, Suitland, MA, USA. [査読無し]

Ito Atsunori 2017 “Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions” International Workshop Reconnecting

Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions, Museum of Northern Arizona, Flagstaff, AZ, USA [査読無し]

Ito Atsunori 2017 “Hopi Silversmithing and Mimbres: Fred Kabotie’s activities in the late 1940s” National Museum of Ethnology International Workshop Reconnecting Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions, Museum of Northern Arizona, Flagstaff, AZ, USA [査読無し]

Ito Atsunori 2017 “Reconnecting Hopi Artists with Mimbres Landscape and Pottery Designs” National Museum of Ethnology International Workshop Reconnecting Archaeological Materials with Descendant & Source Communities: Collections Review, Field Trip, Art Work Creation, and Exhibition Planning, New Mexico State University Museum, Las Cruces, NM, USA [査読無し]

Ito Atsunori 2017 “Reconnecting Source Community with Museum Collections: Hopi Collections Review in the US and Japan”, Hibben Center for Archaeology Research (HIBB) at University of New Mexico, Albuquerque, NM. [査読なし]

Kelley Hays-Gilpin and Ito Atsunori 2016 “Decolonizing museum catalogs? Collaborative catalogs and archaeological practice”, WAC8 (8th World Archaeology Congress, Kyoto, Japan: 世界考古学会議京都大会), Doshisha University. [査読あり]

Gerald Lomaventema and Ito Atsunori 2016 “History of Traditional Overlay Jewelry”, Arizona State Parks Homolovi State Park Event “Suvoyuki Day”, Homolovi State Park. [査読無し]

Robert Breunig, Ito Atsunori, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin 2016 “History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity”, Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival. [査読無し]

伊藤敦規 2016 「ソースコミュニティと共に行う博物館資料調査 国立民族学博物館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの意義と内容の紹介」国立民族学博物館・金沢大学 研究フォーラム『文化遺産の保存と活用：ミュージアムの視点から』、国立民族学博物館。[査読無し]

Kathy Dougherty and Ito Atsunori 2016 “Hopi Collection Review Project in the US and Japan” Minpaku International Workshop System Development for the Info-Forum Museum: Philosophy and

Technique, National Museum of Ethnology, JAPAN[査読無し]

伊藤敦規 2015 「民族学博物館與資源社群の再相會——意義與方法論」国立臺灣歴史博物館與日本国立民族学博物館交流工作坊『民族学與歴史学的の交會』国立臺灣歴史博物館 [査読無し]

Ito Atsunori 2015 “ Collaborative Collection Research with Source Community: Introduction of ‘ Info-Forum Museum Project ’ ”, 36th American Indian Workshop “ Knowledge and Self-Representation, ” Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main[査読あり]

伊藤敦規 2014 「米国先住民ホピ製宝飾品の真髄を真贋判断から考える」(首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループシンポジウム『伝統文化は誰のもの？ 文化資源をめぐる協働を考える』) 首都大学東京。[査読無し]

Robert Breunig, Kelley Hays-Gilpin, Ito Atsunori 2014 “ Reconnect Museum and Source Community, ” International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology [査読無し]

伊藤敦規 2014 「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館の Info-Forum Museum 構想の報告」、アメリカ学会第 48 回年次大会、米国先住民分科会、沖縄コンベンションセンター。[査読無し]

Ito Atsunori 2014 “ Collaborating with the Source Community, ” IUAES panel Re-imagining ethnological museums: new approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge (Commission on Museums and Cultural Heritage), Makuhari Messe. [査読有り]

[図書](計 3 件)

伊藤敦規 2017 『国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料熟覧 ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告 SER) 140 号、1371 ページ。[査読有り]

伊藤敦規 2016 『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有 民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』(国立民族学博物館調査報告) 137 号、136 ページ。[査読有り]

山崎幸治、伊藤敦規、城石梨奈編 2015 『アイヌ・アートが担う新たな役割 米国先住民アートショーに学ぶ』、北海道大学 アイヌ・先住民研究センター、155 ページ。[査読無し]

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

展示会

『大自然への敬意 北米先住民の伝統文化(天理大学附属天理参考館第 81 回企画展)』(会期：2018 年 4 月 4 日-6 月 4 日)、天理大学附属天理参考館。

『太陽の塔からみんぱくへ 70 年万博収集資料』(会期：2018 年 3 月 8 日-5 月 29 日)、国立民族学博物館本館企画展示場。

『ホンモノ?ニセモノ? 『ホピ製』宝飾品の真作贋作』(首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの? 文化資源をめぐる協働を考える』)、(会期 2014 年 10 月 31 日-11 月 13 日)、首都大学東京 91 年館。

報道関連情報

『「神聖な資料」広がる非公開』『読売新聞(関西版)夕刊 3 面』(2018.04.16)

『異文化配慮「見せない」展示』『産経新聞夕刊 1 面』(2018.03.31)

『福山の資料館収蔵品に脚光 米先住民ホピのカチナ人形』『中国新聞 朝刊社会面 27 面』(2016.4.17)

“ International collaboration helps connect Museum of Northern Arizona to Hopi community ”, *Navajo-Hopi Observer* 34(50), p. 1, 4. (2014.12.10)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 敦規 (ITO, Atsunori)
国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・准教授
研究者番号：50610317